

## 「第九」ブームの側面 横溝亮一

つい先頃、海外旅行中にロンドンである音楽好きのイギリス人と語りあう機会があった。日本の音楽事情に興味を持つ同氏の質問に答えながら「十二月になると日本ではベートゥヴェンの『第九』が全国で五〇回から百回ぐらゐは演奏されるですよ」と私がいうと、このイギリス人は仰天して「それはイギリス中のオーケストラの演奏する『第九』の十年分に匹敵する」といい、日本という国は何とも理解し難いといった表情で、まじまじと私の顔を見つめるのだった。

僅か一カ月で『第九』の演奏会が数十回も行なわれるというのは、ある意味で日本音楽会の隆盛を示す事実として誇ってよいのかもしれない。ベートゥヴェンの芸術を愛する『信者』が、いかに日本に多いかを物語る一つの証拠ともいえるだろうからだ。しかし、かげの事情がある程度知っている私は、もの問いたげなこのイギリス人の視線

をまともに受けとめかねた。私は「日本人は『第九』を一種の宗教音楽と考えていて、クリスマス・シーズンのこの時期、歌い、きくことによつて贖罪したような気になるのだ」と、あまり説明にならぬ説明をしてお茶を濁し、話題をほかに移してしまった。

さて、帰国してから程なく、オペラの団体である二期会から一通の封書が届いた。あけてみると、七四年度十二月「第九交響曲一覧表」なるものが出てきた。これは二期会所属の歌手たちがソリストとして出演する「第九」公演を一覧表にまとめたもので、これによると七四年十二月の全国「第九」公演は七十一回、うち東京だけでなんと三十六回も行なわれている。

ついでに、指揮者、歌手、オーケストラなどで回数が多いものを拾ってみると、指揮では外山雄三が断然トップで十八回、ソプラノは中沢桂、常森寿子が十三回、アルトは成田

絵智子が十八回、テノールは丹羽勝海が十八回、バスは栗林義信が十五回、オーケストラでは大阪フィルハーモニー交響楽団が十二回となっている。

東京では三十六回だが、近郊の千葉、八王子、藤沢といった都市も含めた首都圏で数えると四十五回、実に一日に一回半の「第九」が演奏されていることになる。こうなると、私には「第九」のバーゲン・セールとしか感じられない。

また、一カ月に十八回も同じ曲を指揮し、歌う外山雄三や成田絵智子らは、なんともご苦労というほかないが、いったい彼等が、毎回感動をこめてこの偉大な曲に取り組めるものなのかどうか私は大いに疑問に思っている。

数年前、NHK交響楽団の指揮者として来日したロプロ・フォン・マクチャツチ氏に会った時、彼は「第九」についてこんな話をしてくれた。

「私が『第九』をはじめて振つたのは五〇歳過ぎてからでしたよ。ヨーロッパではあの曲は三〇や四〇の若手指揮者ではとても指揮できるものではないというのが常識になっていましてね。若い指揮者がやりたいと云つた

って、まず絶対に振らせてもらえない。また若い指揮者にとって「第九」を指揮するというのは最後の目標みたいなものだから、年輩になるまではやろうとしないんです。やったって恥をかきだけですからね」

マタチツチによれば、「第九」という曲はおそろしくいろいろな要素が凝縮されている音楽だから、一回指揮しただけでクタクタになる。やるたびに我が身の至らなさが恥しく思われるばかりで、一年に一回もやれば、じゅうぶん過ぎる程だ、というのだった。

マタチツチほどの大指揮者がそういうのに日本ではまだまだ若手といえる人が、月に十何回も「第九」を指揮するというのは、余程偉大なのか、無神経なのかどっちかだろう。ところが、どんな演奏をしようが「第九」コンサートとなると、必ず満員になるのが泣きどころなのである。満員になるということは、もうかることを意味する。そこで、日頃経済的に恵まれぬ音楽家たちは「第九」公演でボーナス稼ぎをするのだ。昨夜もある用件で、自主運営を続けているオーケストラのメンバーと電話で話したのだが、その時、彼は六回の「第九」演奏会の切符が全部売り切れだったので、ようやく一カ月分のボーナス配分が

出来ると喜んでいた。

ききたいという聴衆側の需要があるから公演数もふえるといえる反面、音楽家側の裏面のぞけばかくの如しで、「第九」はボーナス稼ぎに絶好の曲であるが故に、インフレの進行と共に回数が増えるのである。要するに「第九」ブームは、そのまま日本の音楽界あるいは文化の世界の貧しさを象徴しているのだ。

日本人は古来、精神文化を大切にす国民であつた筈なのに、戦後の復興、高度成長は、経済価値を生まないものに目を向けぬ類をを広げてしまった。政府の年間予算などもそうしたところがよくあらわれている。日本政府の文化関係予算は先進諸国の最低で、もっともそうした方面に力を入れている西ドイツの約二十分の一にしかならない。

先般訪れた西ドイツのハノーヴァー市は人口約七〇万の中都市だが、このオペラハウスの年間予算は約三十五億円で、日本政府文化庁の芸術関係総予算を遙かに上回る。かくして、食っていけない音楽家は、せめて「第九」で越年資金を稼ぐことになるのである。

ベートーヴェンの第九交響曲が世界初演されたのは、一八二四年二月、ウイーンにおい

てであつた。演奏が終つた時耳がきこえぬため、呆然と突つ立っているベートーヴェンを、アルト歌手が袖を引いて客席の方を向かせ、ベートーヴェンは熱狂している聴衆の姿をみて、はじめて自作の成功を知つた——というの有名なエピソードである。

日本での「第九」初演は大正十三年（一九二四年）十一月、上野の東京音楽学校（現東京芸大）奏楽堂で、ドイツ人指揮者クローンによるものであつた。ここで気づくように、ウイーンでの初演と日本初演との間には丁度百年の差がある。日本初演以後、ほぼ半世紀が過ぎて、わが国の音楽界は飛躍的に発展したといえるかもしれない。しかし、私には「第九」の冗濫が実は音楽界の貧しさの象徴であるように、もっぱら上べの形だけを似せた虚妄の繁栄であると思えない。

毎年、私はこの「第九」シーズンになると、なんとも憂鬱な気分に襲われる。ウイーンにおける初演と日本初演の差百年は、そのまま彼等の音楽界の土壤、歴史の差でもあるように思えてならないのである。